

現できればと思い、一緒にリレーを始めることにしました。「行ってきます」と言って戸外に出たのは、教師の居場所を幼児に知らせるためです。「何かあったときには、ここへ行けば先生がいるから大丈夫」と、安心して遊びを続けてほしいと思いました。ただこの時、私の言葉のせいで、子どもの興味が移ってしまったのではという感じました。もう少し、子どもの遊びの進行状況をみて、声をかけていく必要があったかと思います。

A男の走りについては、私も実に頼もしく感じました。なかなか戸外での運動遊びに参加しようとしないう男ですが、この日はとても良い表情で走っていました。一学期は、一人で絵本を読んで過ごしたり、仲間と少し離れて自分のペースで遊ぶ姿が見られましたが、さまざまなお友達のかかわりを経て、遊びの中で自分の思いをはっきり友達に出したり、一緒になって遊ぶことを楽しむようになってきました。たとえば、積み木遊びでは、今までは何となくその場において参加するというような姿

でしたが、今は友達の置き方を見て、「そうじゃない、トリケラトプスを作るには、こういうふうにやればいいんだよ」と率先して積み木を組み立てていき、それを受けて、B男が、「いい考えだね」と認めるといった場面も見られるようになりました。このようなかわりの中で、徐々にA男自身が仲間の中で自己発揮できるようになってきているのではと考えています。また、先生の記録と考察を読んで、私自身A男を肯定的にとらえられるようになったことがあります。A男が、好奇心をもつてさまざまな環境とかわり、自分なりのペースで物事に取り組もうとしていることを私自身が感じられるようになりました。そのことにより、私とA男の関係性も良い方向に変わってきたのかもしれないと思います。

さて、この日に限らず、男児は七人かたまつて遊ぶことが多く、協調性をもつて遊びを進めていこうとする姿がよく見受けられます。「仲良くやっぺいこう」という思いを幼児から感じることもあり、気を使ったり、譲っ

たり、何か言われてもおどけることで笑いに変わって済ませたりすることがあります。そのようなときには、「嫌なときには怒っていいんだよ」と伝えることさえあります。遊びの中でのぶつかり合いもつと必要なのではないかと感じることもしばしばあります。この少ない人数の中でどのように、それを実現させていけばよいのかと課題に感じています。

そして、指摘された通り「ボウケンジャー」に心奪われている幼児の姿があります。もう少し、ほかの遊びも

…ふたたび観察者から保育者へ

この日の観察に先立つ九月、友達とのかかわり合いという点で気になっていたA男の個人観察記録を取り、考察を添えて読んでいただきましたが、「A男を肯定的にとらえられるようになった」のは、やはり先生の中にA男の行為を理解したい、受け止めたいという思いがあったからだと思います。そして、今のこのA男の変化は、先

経験してほしいと思って、別の遊びを提示してみても、またボウケンジャーへと戻るということもあります。また、あまりボウケンジャーに興味がない幼児が、別の遊びを始めてみても、「七人でかたまつて遊びたい」「仲間に入っていたい」という思いから、ボウケンジャーに引き込まれていくことがあるように思われます。このような中、ボウケンジャーごっこを盛り上げていくべきか、また、ほかの遊びをどのように提示していけばよいのかということ、私自身が日々悩んでいるところです。

生のA男に対する「肯定的な理解」があつてこそであつたと感じます。

また、A男と保育者の、というよりもむしろ、子どもたちと保育者の「関係性」は、観察者からも「良い方向」へと変容してきているように見えます。この日のA男のすがすがしい走りと同様、子どもたちの中にいる先

生自身も以前と比べ、伸び伸びと生命感あふれて見えるようになった気がします。

それは、観察者から見ると、「近さ」とか「親密さ」とか「一体感」、あるいは「呼応し合う関係」「了解しあっている安定感」のように感じ取れるのですが、これより以前、子どもとの距離感に悩み、かかわり方を模索していた先生自身からは、どのような変化として実感されるのでしょうか。聞いてみたいところです。

しかし、一方では、このボウケンジャーごっこという遊びに保育者がどのようにかかわり、どういう方向で援助を工夫しているかという迷いも感じられます。この日のリレー後、片づけに至るまでのまとまった時間をボウケンジャーごっこで過ごした男児たちに、先生は一度も直接的かかわりをもちませんでした。しかも、同じ室内で女兒たちと過ごしていた先生の視線は終始、男児たちに注がれており、それでいて先生が、この遊びへの介入を敢えて控えているように感じられました。

また、私が、B男の、友達に積み木の置き場所を確認してから置いたり、あとから来て「入れて」と頼む友達のために、自分の場所を譲ったりする行為を、「仲間の意向を確かめるB男らしさ」としてとらえていた理解は、少し違っていたようです。先生の理解によれば、実は少人数の子ども同士が、無意識にせよ、「仲間に入っていたい」「仲良くやっていこう」という思いで、自身を相手とつなぎとめている姿であったというわけですね。そう考えると、D男があとから加わろうとした二人と、それを拒む相手との間を一生懸命とりなそうとする行為も、かたまり合う自分たち同士の「人間関係」を、破綻なく「継続」させることにつながっていたように思われてきます。そういえば、拒む側もそれほど強く排除しようとはせず、拒まれた側も入れてもらえない不満を相手にぶつけるでもなく、その辺にとどまって、遊び全体がゆるゆると流れていっていたのが印象的でした。

ボウケンジャーの遊びは、ほかの友達とかたまっていた

いという男児たちの心もちを、うまく実現してくれる一種の「仕掛け」のような役割を果たしているのかもしれない。いわばその仕掛けに助けを借りて、男児同士は依存し合って過ごしているのでしょう。十分に依存し合

…ふたたび保育者から観察者へ

A男の成長について先生も同じように頼もしく感じてくれていることを、とてもうれしく思います。確かに私自身も変化している部分があると思います。

私事になってしまいますが、四月当初は、初めての教員生活に戸惑い、幼児たちのかかわり方についても模索する毎日でした。幼児たちへの言い方一つとっても、どこか遠慮してしまったり、私の思いが届いていないと感じたりすることがしばしばありました。全体に目を配らなければと思つて、一つひとつの遊びへのかかわり方が中途半端になってしまったり、「指導しなければ」と気持ちばかり焦つて見ているだけになってしまつたりと

うこともその先の一步を踏み出すためには必要なことかもしれないが、ほかの遊びを提示して選択肢を広げていくことは確かに必要な援助であり、そこが難しいところでもあると思われます。

いうこともあります。

そんな時に、園の先生に「もつと子どもと一緒に遊んでみたら」とアドバイスを受けました。正直、最初は、自分は遊んでいるつもりなのにどうすればよいのだろう、と悩みました。しかし、ある時、私が「入れて」と遊びに入ったら、そのころ対応にとっても悩んでいたある幼児が「いいよ」と受け入れてくれたことがありました。そのことが非常にうれしく、思い切り遊んでみると、その幼児も、とてもよい表情を見せてくれたのです。このことから、「私が楽しいと感じている時は幼児も同じように楽しいと感じているのだ」と実感すること

ができました。

それ以来、自分自身が気負いすぎずに、子どもたちと一緒に遊びを楽しめるようになってきました。また、日々共に過ごす中で子どもの成長する場面に触れ、「こんなことができるようになった」と幼児の姿を前向きにとらえられるようになってきました。まだまだ、同じような悩みを行ったり来たり、失敗や反省の繰り返しの日ですが、このようなことを経て、徐々に子どもとの「距離」が縮まってきたような気がします。

ところで、ボウケンジャーごっこは、男児たち同士の「人間関係」にとってひとつの拠り所になっているという事です。言われたように、ボウケンジャーごっこという遊びへの援助については、私自身とても悩んでいます。研修などで「このような戦いごっこは広がりがないので好ましくないのではないか」という話を聞いたことがあり、私自身がこの遊びはよいのだろうかと思っているところがあるのです。また、毎日同じボウケンジャーごっこだけでなく、もっと、ほかのごっこ遊びに

も興味をもってほしいと考えることもあります。そして何より、この私自身の迷いが、「ゆるゆると流れていく」といった遊び方に見られるように、子どもたちにも伝わっているような気がしません。



「友達と一緒にいたい」という思いを四歳の発達段階から考えて、とても大切な思いとして受け止めながらも、その中で、友達に流されず、「これをやりたい」という遊びを自分から見つけて遊び始められるようになってほしいと思っています。十三人という人数の中でどのよう to その思いを実現させていくか、これからも、日々考えていきたいと思っています。

観察者 矢萩恭子（田園調布学園大学）

保育者 野溝佑希（中央区立明正幼稚園）